片山タイムズ

第十二号

令和五年
六月吉日

誰でも話せる茶の湯の歴史

「茶道習っているならなぜ始まったか教えて」とか言われて、困ることもあると思います。そこで、今回は簡単に茶道のなりたちを説明します。きわめて大雑把になりますが、知らない人に話すには十分かと思います。

1. お茶の始まり

1200年前、中国から遣唐使などで持ち込まれたと推定されます。「日本後記」にて、嵯峨天皇が召し上がった記録が現在一番お茶に関する古い記述です。

2. 二度目の導入

鎌倉時代になってようやく、お茶が広がってきます。「建仁寺」の「栄西」がお茶を持ち帰って現在のように茶筅を使ってお茶をたてました。いまでも建仁寺で4月に四頭茶礼をやっています。また、栄西は「喫茶養生記」を記しこれが日本初めての茶書となります。

建仁寺

3. ひろがり

建仁寺ではじまったお茶は、僧侶以外に公家、武家にも普及していったことが、様々なこのころに描かれた絵巻物でわかります。薬や滋養強壮としてのお茶から、嗜好品・遊興的なものとなり、広がっていきます。

4. 茶道具

室町時代になると、茶道具に価値を見出し美術品として鑑賞されるようになります。

貿易によって大陸より多くの茶道具が入ってきて「唐物」として珍重されます。このころ台子の点前が確立したという説もあります。それ以前は、茶の湯は屋外で湯を沸かし室内に運んでいたのが、屋内で風炉でお茶を点てるようになります。

5. 茶祖

15世紀後半に奈良の茶人、村田珠光やその周辺で新しい美意識が目覚めます。のちの世で「わび茶」といわれるものです。16世紀には武野紹鴎、今井宗久、津田宗及そして千利休が登場します。現在の茶道（抹茶）の系統は千利休の流れの人口が8割以上といわれています。

6. 様々な流派

利休がなくなると、利休の弟子である、古田織部・細川三斎や、寛永の時代には小堀遠州・金森宗和などが登場しそれぞれ独自色を出して流派を形成していきます。一方千家は、表千家裏千家　武者小路千家を成立させた。

7. 茶道の広がり

江戸中期になると、茶道は武士階級だけでなく町人たちに普及していきます。「七事式」が成立し、江戸では、川上不白が表千家を広め一大ブームがおきました。19世紀にはいると松江の松平不味候が名物の収集をし「古今名物類聚」を編纂しました。

8. 近代の茶

江戸から明治に入ると大名に仕えていた家元たちは大きな岐路に立たされます。このころ生み出されたのが「立礼式」です。裏千家11代玄々斎が考案した点茶盤は明治5年の京都博覧会で使用され注目を浴びます。また、薮内家が北野天満宮で「献茶式」を行います。

「献茶式」はそれまでの少人数の集まりではなく多くの門弟を集め、点前の空間を共有できるようになります。現在の大寄せの茶会に通じるものとなります。

認得斎柏叟宗室（10代）

不見斎石翁宗室の長男として生まれます。32歳で家元継承となります。ここまでの歴代のお家元と比べても遅い継承となります。

ただし、若いうちかその才能は高く披露されており、14歳にて口切の茶事を仕切り来客をうならせた逸話があります。

歴代家元の遠忌などを取り仕切り、大きな功績を残しています。また、陶芸に非常に深い造詣を示しており、手びねりの茶碗や茶器を残しています。

子供も6男もうけますが、いずれも夭折してしまいます。

お茶に関連する落語

落語には様々なお話がありますが、茶道に関係するお話もでてきます。それだけ、茶道と江戸時代の一般の人々の距離が近かったことがうかがえます。図書館でCDを借りたり、様々な動画投稿サイトで、聴くことができます。お茶のことが知っていると一段と楽しいかもしれません。

茶の湯

裏千家ならぬ泡千家が登場します。

荒大名の茶の湯（荒茶）

今話題の徳川家康も出てきますし戦国時代が好きな方はより面白いかと。

はてなの茶碗

話のきっかけの場面は清水寺の音羽の滝の茶屋です。いまでもありますね。京都人と大阪人の気質やしゃべり方の違いも注目です。

音羽の滝

今月の利休百首

上手には　すきと器用と　功積むと
この三つそろふ人ぞ　能（よ）くしる

何事も上達するのには、3つのものが必要とされます。1つはその物事が好きであること。2つめは器用であること、3つめはたゆまぬ研さん、修行になります。

なかなか三つそろっている人はいないかと思います。そのものが好きというのはクリアしても器用であるというのは持って生まれたものですし、努力する能力も同様かもしれませんね。難しいですね。

はぢをすて　人に物とひ　習ふべし
是ぞ上手の　基なりける

「聞くは一時の恥　聞かぬは一生の恥」という言葉と同意と考えてよいかと思います。

なかなか、わからない事を「わかりません　教えてください。」という事はなかなかできないことが多いですが日常生活でもお稽古でも、わからないことを積極的に聞くようにするのが上達の近道ではないでしょうか。

お店紹介

前号でお菓子のお話をしましたのでまずはこちら

「紅屋　紅粉屋久右衛門」

江戸時代初期のころから、東海道の22番目の宿場町「藤枝宿」で長く営んでいるお店です。藤枝の宿は最盛期には旅籠が37件と繁栄していました。藤枝宿を治める田中城にも、お菓子を納めていたようです。餡に定評があり、使う小豆などもこだわりがあるようです。

当社中の初茶会や、お稽古の主菓子などでみなさまお口にしていると思います。

是非店頭でもご購入板いただき、ご賞味ください。

アクセス
静岡県藤枝市藤枝4-1-9

紅粉屋製

片山社中 all rights reserved.